

研究の概要

I 研究主題 「児童生徒の特性に応じたコミュニケーション能力を引き出す支援の在り方 － 適切な実態把握に基づいた実践をとおして － 」

II 主題設定の理由

本校は病弱を主障害とする児童生徒と知的障害を主障害とする児童生徒に対して教育を行う知病併置校である。重度重複障害のある児童生徒や医療的ケア対象児童生徒も多く在籍している。本校の教育目標は「自らの病気や障害を乗り越え、力いっぱい努力して明るく生きがいのある生活を送ることができる児童生徒を育てる」である。本年度の重点目標「(1)特別支援教育の専門性の向上」には、「児童生徒一人一人の能力や可能性を伸ばす教育の実践と研究」を掲げている。

本校児童生徒の共通の課題として「コミュニケーション能力の向上」が挙げられる。本校は、障害の程度や発達の状況等それぞれ実態が大きく異なる児童生徒が在籍している。コミュニケーションの面でも、発声や身振り等で意思表示をすることが困難な児童生徒や言語による表出ができるものの自分の気持ちや要求を適切に相手に伝えられない児童生徒も多く、ほとんどの教師がコミュニケーション能力の育成に難しさを感じている。

児童生徒のコミュニケーション能力を引き出す実践に取り組むにあたり、児童生徒の実態を適切に把握することが必要である。本校における児童生徒の実態把握については、担任や教科担任が個々に確認した範囲での情報であることが多く、その把握の方法が正しいのか、客観性はあるのかという点で十分とは言えないことが課題として挙げられる。そこで「適切な実態把握」に視点を置いて研究し、それを基に児童生徒の目標設定と実践を進められるようにしていきたい。

これらのことから、「児童生徒の特性に応じたコミュニケーション能力を引き出す支援の在り方 － 適切な実態把握に基づいた実践をとおして － 」を令和6、7年度の校内研究のテーマとして設定することとした。

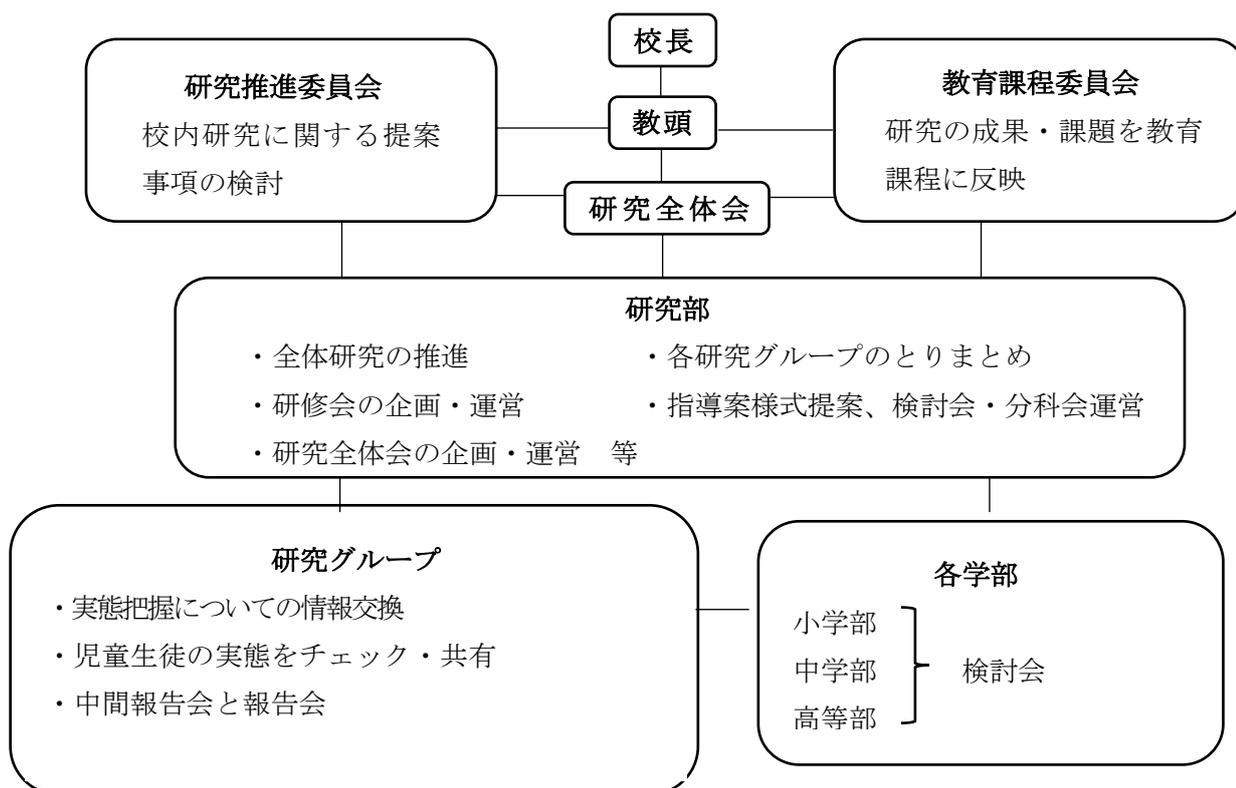
III 研究の目標

「適切な実態把握」をとおして、児童生徒の目標設定と実践を進めることで、児童生徒の特性に応じたコミュニケーション能力を引き出す支援の充実を目指す。

IV 研究仮説

客観的・多角的な実態把握をすることで児童生徒の目標が明確に設定され、児童生徒の特性に応じたコミュニケーション能力を引き出し伸ばすための効果的な支援ができるのではないかと仮定する。

V 研究組織



VI 研究の構想図（別紙）

VII 研究の内容と方法

本研究では、教師が個人またはグループで事例研究を行う。「適切な実態把握」を行うために、段階表やチェックリスト等を活用したり、研究グループ活動で複数の目でチェック・共有したりする。実態把握により捉えた児童生徒の特性や課題を基に、コミュニケーション能力に視点を当てた目標の設定とコミュニケーション能力を引き出す支援の検討をして実践を行う。取り組んだ内容は、事例研究報告書としてまとめる。また研修会を行い、コミュニケーション能力を引き出す指導法や実践例等の学んだことを実践に生かす。研究全体会では、成果や課題を共有し、次年度の研究に生かすことができるようにする。

(1) 研究グループ活動について

・年間4回の実施とし、学部やコースといったまとまりで小グループを設定して意見交換や情報共有を行う。

- ① ・実態把握についての現状確認、情報交換
 ・適切な実態把握について共通理解
 ・段階表やチェックリスト等の紹介や意見交換
 ・対象児童生徒の検討
 ・段階表やチェックリスト等の検討
 ・実態把握の実施に向けて計画立案
- ② ・実態把握の結果から、児童生徒の実態をグループでチェック・共有
 ・目標設定（コミュニケーション能力に関すること）
 ・コミュニケーション能力を引き出す支援の検討
- ③ ・事例研究中間報告
 ・グループでの意見交換・情報共有
- ④ ・グループ内で事例研究報告会

(2) 現職教育研修会を行い、児童生徒のコミュニケーション能力を引き出す指導法や実践例等の学んだことを実践に生かす。

(3) 年度末に研究全体会を実施し、研究グループ活動の成果や課題について共有し、次年度の研究に生かす。

(4) 研究の計画（令和6年度）

月	全体	事例研究・グループ活動	研究部会・研推委
R 6 4	第1回研究全体会（4/25） 学校訪問指導案様式確認 意識調査①		研究推進委員会①（4/17） 学校訪問指導案検討 グループ検討
5		研究日①（グループ活動） （5/1）	意識調査①まとめ 事例研究報告書の様式検討
6	事例研究報告書の様式確認	研究日②（グループ活動） （6/27）	
7	学校訪問指導（7/18）		
8	現職教育研修会（8/20）		
9			
1 0	現職教育研修会（10/21）		
1 1		研究日③（グループ活動） （11/22）	
1 2	意識調査②		意識調査②まとめ
1		研究日④（グループ活動） （1/17）	R 6まとめ・R 7計画立案 研究推進委員会②（1/30）
2	R 6 校内研究について検討・ 確認（職員会議）	事例研究報告書提出締切 （2/5）	
3	第2回研究全体会（3/17）		R 6 実践集録作成（HP）

実態把握

目標設定

指導実践

研究の計画（令和7年度）

月	全体	事例研究・グループ活動	研究部会・研推委
4	研究全体会①（4/24） 意識調査①		研究推進委員会①（4/17） グループ検討
5		研究日①（グループ活動） （5/2）	意識調査①まとめ
6		研究日②（グループ活動） （6/27）	
7			
8	現職教育研修会（8/21）		
9			
10			
11		研究日③（グループ活動） （11/21）	
12	意識調査②		意識調査②まとめ
1		研究日④（グループ活動） （1/22）	R7まとめ・R8計画立案
2		事例研究報告書提出締切 （2/10）	研究推進委員会②（2/9）
3	研究全体会②（3/19）		R7実践集録作成（HP）

（5）2年間の校内研究のまとめ

本研究は、【「適切な実態把握」とおして、児童生徒の目標設定と実践を進めることで、児童生徒の特性に応じたコミュニケーション能力を引き出す支援の充実を目指す。】を目標に事例研究に取り組んだ。

「適切な実態把握」については、チェックリスト等の活用に併せ、研究グループ内で共有したり、相談し合ったりして実態把握を行った。これらの取組により、「児童生徒の新たな一面への気づき」「実態把握の新たな視点の獲得」「実態や課題の共有」「複数の目で児童生徒を捉える」という点について、多くの教員から成果として挙げられた。実態把握にチェックリスト等の活用やグループ活動を設定したことは「客観的・多角的な視点」をもたせることに有効であったと考えられる。

「コミュニケーション能力を引き出す支援」については、児童生徒のコミュニケーション能力を引き出すために、手立てや教材・教具、場所、場面、関わる相手等の様々な支援が講じられた。支援を行った上での成果や課題についても事例研究報告書にまとめられており、学校全体として多くの知見を得、共有することができたことから、「コミュニケーション能力を引き出す支援」についても、充実させることができたのではないかと考えられる。

事例研究の取り組みについては、「実践に直結しやすい」「個々の生徒を詳しく見ることができた」という点で、多くの教員から評価された。チェックリストを活用したり、グループで話し合ったりして実態把握や目標設定を行うことで、児童生徒を改めて客観的に見つめ直すことができ、課題や支援方法を整理する機会となった。また、事例研究報告書様式の準備や研究日前などの事前アナウンスにより、

無理なく研究に取り組めたという意見が多く見られた。

グループ活動については、少人数で、児童生徒の実態に近いグループ編成を行ったことで、「意見が出しやすい」「情報共有がしやすい」という肯定的な意見が多く見られた。担任・教科担当など複数の立場からの視点を得ることで、新たな支援のアイデアを得たり、様々な切り口から児童生徒を見たりすることにつながった。また、一人で抱えがちな悩みを共有し、相談できる場として機能した。

一方で課題としては、授業の担当によっては、授業時間内での変容が捉えにくい場合があることやグループ活動において話題が授業づくり全般に広がり、コミュニケーションという視点がやや曖昧になる場面も見られたことが挙げられる。

本研究を通して、コミュニケーション能力は、教育課程や障害の状態に関わらず、児童生徒全員に共通する課題であり、支援の必要性についても教職員間で実感することができた。校内研究として、共通して「コミュニケーション能力」について取り組んだことにより、課題を意識して実践することができたという意見も多く見られた。本研究は、病弱・重度重複障害教育を含め、本校の実態に即した研究内容であったという意見も多く出ていたことから、有意義な研究になったのではないかと考える。